

倉橋惣三との対話⑧

幼児期の「一人一人」と社会性の成長について(3)

浜口順子

(大学教員)

子どもを「一人一人」として見るには

倉橋先生、子どもを「一人一人」として見るには具体的にどうしたらいいのでしょうか。その子一人だけをただじっと見ることではないことはわかってきました。前回、子ども一人一人は教育の責任単位である、「しかして教育の方法対象は群（グループ）」であると書かれた先生の「就学前の教育」（一九三二年）の一節を引きましたが、それはつまり、生活さながらであることが保育（幼児教育）の基本なのだから、一人一人を、周りの人やモノとの関係性の中でどう在るのかを見るということなのだろうと考え始めています。

倉橋先生は「一人一人」という表現を、戦前も戦後も大切に一貫して使われています。「一人一人」とは心理学的な個性という意味だけでなく、人間の尊厳として動かせない価値があることを示す言葉だと言えるでしょう。また戦後の先生の文章には、さらに、人間が有する一人一人の人權を真摯に捉え、戦後日本の民主的権利の思想を光としようとする息吹が感じられます。本誌一九五二年三月号の「保育の対象は幼児一人々々にある」という論考から、考えてみたいと思

ます。

一人々々を貴ぶというは、基本人權の眞の尊重でもある。それなければ、人權の所在に眞に忠なりといえない。しかし、こゝでいうのは、心理的に方法の正しきを得るためと、人權的に個の確立のためとだけのことではない。寧ろ、もつと実体的に個体的に、日々の実際保育の対象としてある。……保育が集団を対象とするということも、一人々々の保育のための方法的対象として集団生活を必要としていることで、集団が保育関心の究極対象ではない。一人々々を離れて人間愛の眞実はなく、人間愛の結合なくして、保育の眞実はない。愛ほど一人々々に切実でなければならぬものはない。一人々々への切実に総和はあつても、一人々々への切実は決して、総和の部分ではない。

〔『幼児の教育』第五十一卷第三号 p. 2〕

「ケンリ」という言葉を知っていても、ただ理屈で論じているだけでは「切実な」一人一人への関係性（「愛」と表現されている）なしの保育が独り歩きする危うさがある。倉橋先生は、当時の（そして今もある）ケンリでわかったふうになりそうな世の中の風潮への違和感も表明されたのではないだろうか。私はここで、マザー・テレサがたびたび語ったこと——集団や社会という人間集団を助けることはできない、具体的に手を差し伸べられるのは、最も身近にいる家族や隣人だけだという意味のことを思い出します。

子どもをあらかじめ評価の対象にしないこと

一人々々を保育するということは、一人々々を孤独におくことでは決してない。たゞ、一人々々を社会の中に埋没しないことである。社会の中に一人をも見失わないことである。……方法的に個性保育である前に、又、観念的に個人保育である前に、めい／＼をめい／＼として愛し、めい／＼をめい／＼として憂うるこそ保育の真のこゝろである。(中略)

一人々々という以上、関心は各の子らに平均でなければならぬ。しかし、保育者の心のもち方としては、そうした、見失われ易い子、極言すれば、好ましくないような気もする子らに、注意と愛情のより多い傾倒が行われる時こそ、一人を見逃さない実際になり得るのである。(同 p.p. 2-3)

人が一人一人に対して平等に(先生は「平均で」と言われています)関心をもたねばならないとは理屈ではわかっていますが、実際問題としては困難なことであつて、特に、教育において「目立つものに目をつける」傾向があると、倉橋先生はさりと云います。「本来において結果を求めることでもある教育において、よきものに目のつくのは自然でもある。健康児・優秀児が教育者の目につくのは自然である。或はまた、わが教育を遂げ易からしめると思われる柔順児の好ましいのも自然である。」と、「……自然である」を何回もつなげて、教育にかかわる大人のまなざしが偏見から逃れにくいことを警告する。そして、「更に、幼稚園などにおいて、美容の子が教師に好ましいのも、一つの自然でもある」と、苦笑したくなる教師の「自然」にも触れ、外見にすらとらわれやすい大人のまなざしの落とし穴を言い当てています。

一人々々とは、一人をも見失わないことであると共と、保育の対象として予め評価しないことである。
(同 p. 3)

子どもにとって、生活さながらは「自然」であることが重要ですが、教育の場では大人が自然に身を任せると、得てして子ども一人一人が見えない状態に陥る——この矛盾をどう捉えるかがとても難しいことのように思われます。日々、子どもたち一人一人との関係がどうであったかを省察し、子どもの生活が充実していたか、そのために私は何ができたか、もっとできることはなかったかを振り返り、また新たに一人一人が見え始めるような保育の構えを用意すること。そのような省察によって、子どもを見る大人の目を曇らせてしまう「自然」に気づき、子どもとの関係を見直し、謙虚に保育を立て直すのだと思います。

Plan - Do - Check - Act を繰り返すことで工業製品の出来栄をチェックしては生産工程を修正するPDCAサイクルという用語がありますが、最近、幼児教育の世界でもこの言葉がよく使われるようになりました。PDCAにおける「C」チェックとは、本来、保育者の省察とはまったく出自の異なる概念なのです。ある理想像（完成モデル）へと子どもが近づかないから省察するわけではありません。工業製品がもし「一つ一つ」ユニークさを発揮していたらそれで欠陥商品になってしまいますが、保育の中では、子ども一人一人がそれぞれ特別な存在として尊重されるこそが大切に、そのようになっていくかどうか、大人は繰り返しセルフ・チェックしなくてはならないと言えるでしょう。